



公益財団法人 サントリー芸術財団 サントリー美術館 107-8643 東京都港区赤坂 9-7-4 東京ミッドタウンガーデンサイド Tel: 03-3479-8604 Fax: 03-3479-8644

No. sma0038

(2018.11.8)

サントリー美術館
「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展 開催

会期：2019年2月6日（水）～3月31日（日）



枯木寒鶲図 河鍋暁斎 一幅

明治14年（1881）

榮太樓總本鋪



閻魔・奪衣婆図 河鍋暁斎 二幅

明治12年（1879）または18年（1885）以降

林原美術館



サントリー美術館（東京・六本木／館長：鳥井信吾）は、2019年2月6日（水）から3月31日（日）まで、「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展を開催します。

河鍋 暁斎（かわなべきょうさい）は天保2年（1831）、下総国古河（現・茨城県古河市）に生まれました。数え2歳のときに家族とともに江戸に出て、7歳で浮世絵師・歌川国芳のもとで絵を学び始めます。その後、駿河台狩野派の前村洞和（?～1841）や、洞和の師・狩野洞白陳信（?～1851）に入門し、独立後は「狂斎」と号し、戯画などで人気を博しました。そして、明治3年（1870）40歳のとき、書画会で描いた作品が貴顕を嘲弄したなどとして投獄され、以後、号を「暁斎」と改めました。

この筆禍事件や明治政府を茶化したような風刺画によって、暁斎は「反骨の人」というイメージで語られるようになります。もちろん、38歳で明治維新を迎えた暁斎が、当時の江戸っ子たちと同様、新しい政府や急速な近代化に対して複雑な思いを抱いていたことは想像に難くありません。しかし、これらの行動の根底にあったのは政府に対する強い反発ではなく、あくまでも、慣れ親しんだ江戸文化への思慕であったと考えられます。

江戸幕府の終焉とともに狩野派は衰退していきますが、暁斎は生涯、狩野派絵師としての自負を持ち続けました。暁斎の高い絵画技術と画題に対する深い理解は、日々の修練と古画の学習を画業の基礎とした狩野派の精神に支えられたものでした。たとえば、晩年に日課として制作していた観音図や、先人たちの作品を丹念に写した縮図などからは、作品と真摯に向かい合った暁斎の姿がうかがえます。

本展では「狩野派絵師」としての活動と「古画学習」を大きな軸としながら、幕末・明治の動乱期に独自の道を切り開いた暁斎の足跡を展望します。

《 展示構成 》

第1章 暁斎、ここにあり！



花鳥図 河鍋暁斎 一幅 明治14年（1881）

東京国立博物館 Image: TNM Image Archives

卓越した画技を持っていた暁斎は、着色と水墨という2つの表現を使いこなし、仏画・花鳥画・美人画など、多岐に渡るジャンルで優れた作品を遺しました。明治14年（1881）、《枯木寒鴉図》が第二回内国勧業博覧会で事実上の最高賞にあたる妙技二等賞牌を受賞すると、暁斎の画名は一気に高まります。《枯木寒鴉図》が水墨技術の粋を尽くした作品であったのに対して、同時に出品した《花鳥図》は緻密な描写と鮮やかな彩色を駆使した着色画であり、暁斎の画域がいかに幅広いものであったかが分かります。暁斎には宴会などで描いた即興の「席画」も多く、

ともすれば、勢いのある筆致こそが暁斎の特徴のように思われるがちですが、じっくりと時間をかけて構想を練り、緊張感のある筆運びで描いた作品の数々は、暁斎が当時の画壇のなかでも傑出した画力を備えていたことを示しています。

本章では、画業を代表する名品によって、暁斎の真骨頂をご覧いただきます。

【主な出品作品】

・枯木寒鴉図	河鍋暁斎	一幅	明治14年（1881）	榮太樓總本鋪
・花鳥図	河鍋暁斎	一幅	明治14年（1881）	東京国立博物館
・山姥図	河鍋暁斎	一幅	明治17年（1884）	東京国立博物館
・般若十六善神図	河鍋暁斎	一幅	慶応2年（1866）頃	東京・深大寺

第2章 狩野派絵師として



毘沙門天像 河鍋暁斎 一幅 嘉永元年（1848）

河鍋暁斎記念美術館



虎図 河鍋暁斎 一面 19世紀

東京・正行院

暁斎は10歳のとき、駿河台狩野派の前村洞和に入門します。洞和は暁斎を「画鬼」と呼び、その才能を愛しました。しかし翌年、洞和が病氣になると、暁斎は洞和の師である駿河台狩野家七代目当主・洞白陳信のもとに移り、狩野派絵師としての基礎を身に付けていきます。早くから頭角を現した暁斎は、嘉永2年（1849）、
「洞郁陳之」の号を拝領し、19歳という異例の早さで修行を終えました。さらに明治17年（1884）には、駿河台狩野家九代目当主・洞春の臨終に際して「画技遵守」を依頼され、宗家・中橋狩野家の永恵立信（1814～91）に再入門するなど、狩野家との関係は晩年まで続きました。暁斎は様々な画風の作品を遺していますが、その制作を根底には、狩野派絵師として身に付けた力強い筆線と、安定した構図を生み出す確かな構成力がありました。

本章では狩野派門下時代の作品や、狩野派的な筆法・画題の作品を中心に、狩野派絵師としての暁斎の姿を見ていきます。

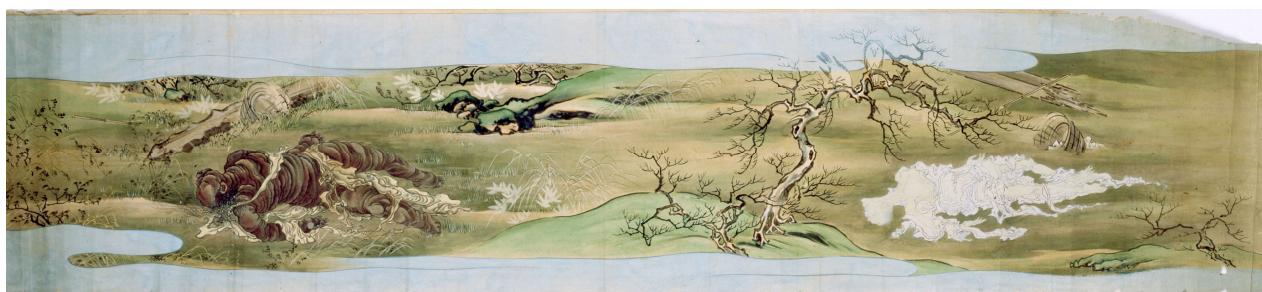
【主な出品作品】

- ・毘沙門天像 河鍋暁斎 一幅 嘉永元年（1848） 河鍋暁斎記念美術館
- ・上畠闇魔図 河鍋暁斎 一幅 明治元年（1868） 個人蔵
- ・豊干禪師と寒山拾得図 河鍋暁斎 一幅 明治3年（1870）以前 東京国立博物館
- ・眠龍図 河鍋暁斎 一幅 明治4年（1871）以降 東京・靈雲寺
- ・虎図 河鍋暁斎 一面 19世紀 東京・正行院
- ・司馬温公龜割図 河鍋暁斎 二幅 明治14年（1881）以降 大英博物館

第3章 古画に学ぶ



鳥獸戯画 猫又と狸 河鍋暁斎 一面 19世紀
河鍋暁斎記念美術館



九相図 河鍋暁斎 一面 明治3年（1870）以前
河鍋暁斎記念美術館

暁斎には、古画を学び、そこに自身の個性を加え、新たな命を吹き込んだ作品が数多く見られます。暁斎自身が挿絵を描いた伝記『暁斎画談』には、宋元の名家や、雪舟などの中世絵画、元信や探幽などの歴代狩野派絵師、土佐派、円山派、

尾形光琳、谷文晁、鈴木春信や喜多川歌麿らの浮世絵といった、先人たちの作品の模写が多数掲載されており、曉斎がいかに広く過去の名品を研究していたかが分かります。また、画卷や画帖形式の古画縮図も複数存在しており、古画の模写をさらに模写するだけでなく、ときには原本そのものを前にして、熱心に図様を写しています。

狩野派の教育課程では、和漢の大家たちの作品の臨写を行い、その上達が認められると、ようやく師の彩色などを手伝うようになります。最晩年まで続いた曉斎の古画学習には、常に狩野派の基礎に立ち返り、制作の軸足を確認しようとする実直な姿勢が見て取れます。

本章では、曉斎画の原本となった作品との比較を交えながら、曉斎がいかに古画と相対し、自身の作品へと昇華させていったのか、その様相をたどります。

【主な出品作品】

- | | | | | |
|------------|------|------|--------------|-----------|
| ・放屁合戦絵巻 | 河鍋曉斎 | 二巻 | 慶応3年（1867） | 河鍋曉斎記念美術館 |
| ・放屁合戦絵巻 | 一巻 | 室町時代 | 文安6年（1449）写 | サントリー美術館 |
| ・九相図 | 河鍋曉斎 | 一面 | 明治3年（1870）以前 | 河鍋曉斎記念美術館 |
| ・鳥獣戯画 猫又と狸 | 河鍋曉斎 | 一面 | 19世紀 | 河鍋曉斎記念美術館 |
| ・蛙の蛇退治 | 河鍋曉斎 | 一面 | 明治12年（1879）頃 | 大英博物館 |
| ・四季耕作図 | 河鍋曉斎 | 二幅 | 明治4年（1871）以降 | 個人蔵 |

第4章 戯れを描く、戯れに描く



鷹に追われる風神図 河鍋曉斎 一幅

明治19年（1886）

イスラエル・ゴールドマン・コレクション（コンドル旧蔵）

Photo：立命館大学アート・リサーチセンター

浮世の戯れを描いた遊宴図や、世の中を逆手にとった風刺画は人々を夢中にさせ、暁斎の戯画は熱烈な支持者を獲得していきます。ときには風刺を意図していない描写にまで深読みがされることもあり、「戯画の暁斎」というイメージがいかに浸透していたかが分かります。また、酒席などで筆を執った「席画」もまた、暁斎にとっては「戯れ」の絵であったのではないでしょうか。

これらの戯画作品については、これまで、最初の師である歌川国芳との関連で語られてきました。しかし近年、狩野探幽周辺で複数の戯画が制作されていた実態が明らかになりつつあります。暁斎はこのような探幽の戯画を所持していたことが知られており、暁斎の戯画制作にも大きな影響を与えたと考えられます。本章では、狩野派の戯画作品とともに、今日でも根強い人気を誇る暁斎の戯画や席画をご覧いただきます。

【主な出品作品】

- ・吉原遊宴図 河鍋暁斎 一幅 明治12年（1879）以降 河鍋暁斎記念美術館
- ・鷹に追われる風神図 河鍋暁斎 一幅 明治19年（1886）
イスラエル・ゴールドマン・コレクション（コンドル旧蔵）
- ・貧乏神図 河鍋暁斎 一幅 明治19年（1886）
イスラエル・ゴールドマン・コレクション

第5章 聖俗／美醜の境界線



幽霊図 河鍋暁斎 一幅

明治元年～3年（1868～70）頃

イスラエル・ゴールドマン・コレクション

Photo：立命館大学アート・リサーチセンター

聖なるものと俗なるもの、生けるものと死ぬるもの、美しいものと恐ろしいものが隣り合う暁斎独特の世界観は、暁斎画の魅力の一つです。一見、美人画風であっても、その背景には複雑なストーリーが織り込まれ、恐ろしい幽霊画も、どことなく在りし日の美しい姿を感じさせるなど、相反する価値観を混在させる表現は、暁斎の画力があつてこそ成し得たものといえます。本章では、心の機微まで描き出すような暁斎の人物画に迫ります。

【主な出品作品】

- ・地獄太夫と一休 河鍋暁斎 一幅 明治4年（1871）以降
イスラエル・ゴールドマン・コレクション
- ・地獄極楽図 河鍋暁斎 一幅 明治元年（1868）以前 東京国立博物館
- ・閻魔・奪衣婆図 河鍋暁斎 二幅 明治12年（1879）または18年（1885）以降 林原美術館
- ・幽霊図 河鍋暁斎 一幅 明治元年～3年（1868～70）頃
イスラエル・ゴールドマン・コレクション
- ・幽霊図 河鍋暁斎 一幅 明治4年（1871）以降 大英博物館

第6章 珠玉の名品



惺々狂斎画帖（二） 河鍋暁斎 一帖のうち一図

明治3年（1870）以前

河鍋暁斎記念美術館

暁斎の代表作というと、迫力ある大画面作品が印象的ですが、実は小画面にも魅力溢れる作品が数多く見られます。とくに、特定の注文主のために、手元で楽しむことを想定して制作された画帖には、各ページの細部にまで緻密な彩色がほどこされ、見飽きることはありません。本章では、まるで宝石箱をのぞき込むような画帖の世界へご案内いたします。

【主な出品作品】

- ・風俗鳥獸画帖 河鍋暁斎 一帖 明治2～3年（1869～70）個人蔵
- ・惺々狂斎画帖（一） 河鍋暁斎 一帖 明治3年（1870）以前

河鍋暁斎記念美術館

- ・惺々狂斎画帖（二） 河鍋暁斎 一帖 明治3年（1870）以前

河鍋暁斎記念美術館

第7章 暁斎をめぐるネットワーク



達磨図 河鍋暁斎 一幅 明治18年（1885）

イスラエル・ゴールドマン・コレクション（コンドル旧蔵）

Photo：立命館大学アート・リサーチセンター



野見宿禰と当麻蹶速図 河鍋暁斎 一面

明治7年（1874）

東京・湯島天満宮

暁斎のもとには、彼の才能を慕う様々な人々が集まりました。とくに有名なのが英國人建築家ジョサイア・コンドル（1852～1920）との親交で、お雇い外国人として来日したコンドルは、暁斎の弟子となりました。コンドルは暁斎の臨終時にも駆けつけており、2人は国籍を超えた強い信頼関係で結ばれていました。コンドルは暁斎の没後に画業をまとめた研究書を出版しており、海外で暁斎の名声が高まる大きなきっかけを作っています。

また、各地の神社仏閣や料亭などには、暁斎が直接納めた作品も伝来しており、多くの人々が暁斎の作品を求めたことが分かります。そして、日々の生活を綴った『暁斎絵日記』には、複数の文化人たちが入れ替わり立ち替わり暁斎を訪ね、交流を持った様子が記されています。

最終章では、暁斎とゆかりのある人物や場所に伝わった作品を中心に、暁斎をめぐる文化ネットワークの広がりを追います。

【主な出品作品】

- ・達磨図 河鍋暁斎 一幅 明治18年(1885)
イスラエル・ゴールドマン・コレクション(コンドル旧蔵)
- ・野見宿禰と当麻蹶速図 河鍋暁斎 一面 明治7年(1874) 東京・湯島天満宮
- ・龍虎鷹山水図衝立 河鍋暁斎・河鍋曉雲・河鍋曉翠合筆 一双
明治4年(1871)以降 東京・湯島天満宮
- ・蘭陵王図 河鍋暁斎 一面 明治4年(1871)以降 東京・赤坂氷川神社
- ・暁斎絵日記 河鍋暁斎 一冊 明治3、4、11年(1870、71、78)

大東急記念文庫

【本展における展覧会関連プログラム】

◎学芸員によるギャラリートーク[ガイドシステムを使った展示室内レクチャー]

2月22日(金) 18時30分~19時30分

会場: サントリー美術館 展示室

定員: 30名(先着順/当日17時より3階受付にて整理券配布)

料金: 無料(別途要入館料)

「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」展 開催

- ▼会期：2019年2月6日（水）～3月31日（日）
- ▼主催：サントリー美術館、河鍋暁斎記念美術館、朝日新聞社
- ▼協賛：三井不動産、三井住友海上火災保険、サントリーホールディングス
- ▼協力：日本航空
- ▼会場：サントリー美術館
東京都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3階
〈最寄り駅〉 都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8より直結
東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結
東京メトロ千代田線乃木坂駅出口3より徒歩約3分

【基本情報】

- ▼開館時間：10時～18時
※金・土および2月10日（日）、3月20日（水）は20時まで開館
※いずれも入館は閉館の30分前まで
- ▼休館日：火曜日（ただし3月26日は18時まで開館）
- ▼入館料：一般1,300円、大学・高校生1,000円、中学生以下無料
※20名様以上の団体は100円割引
- ▼前売：一般1,100円、大学・高校生800円
サントリー美術館受付、サントリー美術館公式オンラインチケット、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット、イープラスにて取扱（各種プレイガイドは一般のみ販売）
※前売券の販売は11月28日（水）～2019年2月5日（火）
※サントリー美術館受付での販売（一般、大学・高校生）は11月28日（水）～2019年1月20日（日）の開館日
- ▼割引：
 - ・WEB割：ウェブサイト限定割引券提示で100円割引
 - ・携帯割：携帯サイトの割引券画面提示で100円割引
 - ・あとろ割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で100円割引
※割引適用は一種類まで（他の割引との併用不可）

▼点茶席（お抹茶と季節のお菓子）

日 時：2月7日（木）・21日（木）・28日（木）、

3月7日（木）・21日（木・祝）

11時30分～17時30分（入室は17時まで）

13時、14時、15時にはお点前があります。

会 場：6階茶室「玄鳥庵」 定員：1日限定50名（当日先着順）

点茶券：1,000円（別途要入館料）

※点茶券は当日10時より3階受付にて販売（予約不可、お一人様2枚まで）

▼一般お問い合わせ：03-3479-8600

▼美術館ウェブサイト：<http://suntory.jp/SMA/>

▽プレスからのお問い合わせ：〔学芸〕池田、〔広報〕光田

TEL：03-3479-8604 FAX：03-3479-8644

メールでのお問い合わせ、及びプレス用画像ダウンロードのお申し込み：

2018年11月8日（木）から https://www.suntory.co.jp/sma/info_press/

以 上